HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	インドの統計制度と行政記録・行政統計の理論 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	岡部, 純一
Citation	北海道大学. 博士(経済学) 乙第7009号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66263
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Jun-ichi_Okabe_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：岡部 純一

審査委員	主査　教授	園 信太郎
	副査　教授	岡部 洋實
	副査　教授	高木 真吾

学位論文題名

インドの統計制度と行政記録・行政統計の理論

インドの統計制度は1993年に行われた憲法改正を受けて、今日大改革の激動の中にある。当論文は、この改革のあり様を活写し、問題点を指摘し、提言を行っている。改革の眼目は、パンチャヤットあるいはパンチャヤティ・ラージにある。これは農村部自治共同体とでも訳される独特の組織であり、日本において適合する組織を見出すことは困難である。しかし、村落パンチャヤット、郡パンチャット、県パンチャヤットの内、基底部分に相当する村落パンチャヤットは、日本の「村、village」に相当する。パンチャヤットは慣習法的な自治を以前より続けてきたのだが、今日では、その自治が行政上、正式に、認められている。しかも、インドにおける最も基本的諸統計を、このパンチャヤットが収集し記録し保存することが行政上要求されている。すると中央政府の出先機関との兼ね合いが問題となる。当論文は、出先機関とパンチャヤットが生産的に協力して、統計の質を向上させるべきであると指摘し、良い事例と、改良の余地がある事例とをあげて、生産的提言を行っている。

当論文はパンチャヤットにおけるデータニーズを三つに分類する。第1は、民主的自治のためのデータニーズであり、特に、出先機関からパンチャヤットへの権限移譲のプロセスに関るデータニーズである。これは、結局、出先機関が蓄積してきたデータを、パンチャヤットが統計として引き継ぐ事を含む。第2は、パンチャヤット財政関連のデータニーズであり、第3は、パンチャヤットが計画を策定する際の、データニーズである。従来は、第3のデータニーズのみが着眼されてきたようだが、当論文は、第1及び第2のデータニーズの重要性を提言している。ここで注意すべきなのは、第1のニーズは、パンチャヤット自身に関するデータへのニーズに関る。つまり、パンチャヤットは、健全な組織運営のために、常時自身を観察する必要があるのである。だが、パンチャヤットのパフォーマンスをとらえるこの統計の作成は遅遅としており、ぜひとも急がねばならないことである。

当論文は、インド憲法第 73 次改正法第 243G 条の内容に踏み込み、パンチャヤットに権限委譲できる担当業務を精査する。この権限は 29 項に要約され、さらに当論文は、これを以下のように六つに再要約する。つまり、A. 第一次産業関連担当業務事項、B. 教育関連担当業務事項、C. 保健・児童発達関連担当業務事項、D. 貧困対策・社会福祉関連担当業務事項、E. インフラ関連担当業務事項、F. 商工業関連担当業務事項、である。だが、これらの担当業務が州政府との関りで、どこまで有効に移譲できるのかは、残念ながら不透明である。

さらに具体的な問題として、出生届及び貧困への統計的接近がある。出生した子供が常住地に登録されずに、出生した場所、特に病院がある地区に、登録されてしまい、児童に対する適正な人口把握が為されていないのである。この問題は、パンチャヤット統計がうまく機能すれば解決できるはずのものであるが、いまだに課題として残っている。インドには、日本におけるような住民基本台帳が存在していないのである。また貧困の問題は深刻であり、一日でも早く、貧困世帯に関るパンチャヤット統計が作成されなければならない。

所で当論文は、ドイツの統計家である G. v. Mayr(マイヤー)の思索を批判的に継承している。それは、第二義統計に対する見方に関る。第一義統計とは、国勢調査を典型とする、統計のための統計だが、第二義統計は、行政的組織の行為に関る統計であり、その行政的組織が残すデータから作成される統計である。従って、第二義統計を「業務統計」とよんでも、恐らくは誤解は少ないであろう。マイヤーは、第二義統計が、一義的には、組織が自身に対して為す「自己観察」と見なせることに気づいたのである。「統計」は外在的な「対象」に関るものである。つまり、「統計」とよばれるものは、実は、二重の性格を持っている。だが、マイヤーは、この二重性に深く浸かることはなかったようである。当論文はこの二重性を直視し、深く思索を重ねている。統計家が Klein bottle の上を歩む有様を凝視している。これは勇気が必要かと思われる。

岡部 純一教授は、8 年を超える長きにわたり、英語やベンガル語を駆使し、インドの統計家らと議論、業務、そして思索と批判とを積み重ね、査読つき論文 3 編を公表してきた。その労苦を一本にまとめて頂いた。

以上で当論文を、審査員 3 名全員が、博士号授与にふさわしいと判断する次第である。